

支那人を指すタウガス又はタムガジ

といふ稱呼に就いて

文學博士 桑 原 隲 藏

今の中華民國に對して、古く諸外國人の間に知られた、種々の國號がある。中に就いて尤も普通な國號はシナとカタイとである。China (Cina) 又は Chinas といふ名稱は、古く印度の文献に見えて居るが、それが果して今の中華民國を指すかは頗る曖昧で、學者の中にも之を否定する者が尠くない。^① 希臘人の記録では、西曆一世紀の後半の『エリストラ海航行案内記』に、世界の東端に在る絹の産地を Thina 又は Thinaï と呼び、西曆二世紀の Ptolemy の地理書に、世界の東端に在る國を Sinai と呼んで居る。^② この Thinaï 又は Sinai が、今の中華民國若くはその一部を指すことに就いては何等の疑惑を容れぬ。さればシナといふ稱呼は、後くも西曆紀元前後から、廣く諸外國の間に知られて居つたに相違ない。それが今日に至つても、中華民國の國號として、廣く世界的に使用されて居る。

さてこのシナといふ國號の起源に就いては、Ptolemy の日南 (安南) 説^③、Lacouperie の滇 (雲南) 説^④ もあるが、今日一般に、明末の宣教

師 Martin Martini (衛匡國) 以來の秦説が有力で
學界の一隅から、例へば伯林の Jacobi 氏や、市
俄古の Laufer 氏等から、時に反對の聲を聞かぬ
でもないが⁶⁾ 大勢畧一定して居る。

カタイといふ稱呼は、文献の上では、西曆十三
世紀の半頃の Plano Carpini の紀行の Kitai、又
はアルメニアの Sempad の書信の Chatha を初見
とする。⁶⁾ その他等 Khitai, Cataya, Catai, Cathay
等、若干變形した稱呼も使用されて居る。今日で
も露西亞人、波斯人、希臘人、及び中央亞細亞の
住民等は、依然支那人をカタイと呼ぶ。⁶⁾ このカ
タイといふ稱呼は、契丹 *Khitan* と關係があつて、
契丹人が久しく北支那の一部を占領したから、元
來は支那の北部〔の住民〕をカタイ又はカタイとい
ひ後には北支那全部をも、更に支那全帯をも指す
ことになつたのである。この解釋には今日學界に
異議を唱へる者がない。⁶⁾

二

シナといふ國號より後くれ、カタイといふ稱呼
より前に、西曆七世紀より十四世紀にかけて、約
八百年の間、北塞西域の諸國民は、支那人〔又は
支那〕に對して、タウガス又はタムガジといふ稱
呼を使用した。

タウガス *Taugas* といふ名稱は、初めて西曆七
世紀の初期の東羅馬の *Theophylactus Simocatta*
の歴史に見えて居る。*Theophylactus* のタウガス
に關する記事は、可なり混雜を極め、且つ從來の
學者は未だ十分にこの記事を解釋して居らぬ様に
思ふ。吾が輩はこの記事に就いて多少新しい解釋
を有つて居るが、その發表は他日を期したい。た
だ *Theophylactus* の一節に、

タウガスの領土は河によつて兩分されて居る。

この河は過去に於て交戦中の二大國の境界線を

なした。この二大國は〔その國人〕の着衣の色彩によつて彼此區別される。即ちその一は黒衣を着け、他の一は赤衣を着く。吾々の時代になりて、丁度マウリス Maurice 皇帝が東羅馬に君臨せらるゝ時代に、黒衣の國はこの河を越えて赤衣の國を攻め遂に之を滅ぼして、その手に「タウガスの」領土を統一した。⁶⁰⁾

とある。こは夙に Kaproth の注意せる如く、支那に於ける南北兩朝對立の事實を傳へたもので、境界線の河とは揚子江のことで、マウリスの時代(西曆五八二——六〇二)に、即ち西曆五八九年に北朝の隋が揚子江を越え、南朝の陳を攻め滅ぼして、天下を統一したことを述べたものに相違ない。⁶¹⁾

されど着衣の色彩を異にする二大國に就いては從來信憑すべき解釋を下した學者がない。Yule は嘗てこの解釋に指を染めたが、殆ど紹介するに

足らぬ。⁽⁶²⁾ 吾が輩の管見に據ると、黒衣の國とは北朝の北周(宇文周)を指したものと想ふ。唐の杜佑の『通典』卷六十一に、北周の服章を記して、其在官府吏之屬。服緇衣裳。

とある。かく北周の官吏は皆緇(黒)服を着けしのみでなく、北周の軍人も亦皆黒装をした。『資治通鑑』陳紀六の太建七年(西曆五七五)の條に、北齊の後主高緯が、その西隣の北周を惡み、人をして黒衣を着けて北周の兵に象らしめ、帝躬からこの假設の周兵と争闘して戲となしたことが記してある。黒衣せしめたのは、北周の軍士が黒装を常例としたからである。又同書同卷の太建八年の條に、

周師圍晉陽。四合如黒雲。

とあるに對して、元初の胡三省は、

周戎衣及旗幟皆黒。且兵多。故如黒雲。

と註して居る。更に又同書陳紀七の太建九年(西

曆五七七)の條に、齊主がその部將をして、周軍を偵察せしめた時、群鳥の飛起するを見て、周軍の旗幟と誤認して狼狽退却したことを記せるに、胡三省は、

西(北周)軍旗幟皆黑。齊人時懼。望見鳥飛。以爲周師已至。

と註して居る。唐末に沙陀の軍兵が皆黒装せし故時人が之を鷓軍と稱したのと對比すべきであらう。黒は北周の國色なること、『隋書』の五行志その他に明記されて、その事例頗る多く、この上々引證するに及ばぬ。

赤衣の國とは南朝の陳を指したものと見える。

陳人は一般に赤色を尙んだ。『通典』卷六十一に、陳の服章を記して、

皇太子……自梁天監之後、則朱服。諸王朝服朱衣。絳紗袍……開國公侯伯子男。並朝服紗朱衣。

といひ、以下の内外文武官の朝服は、大抵絳色若くは朱色であつた。南宋の程大昌の『演繁露』卷九に據ると、晉に陳一代のみでなく、南朝を通じて赤色を尙んだことがわかる。

西曆五八一年に黒衣の北周は、その外戚楊氏の爲に國を篡はれ、楊氏の建てた隋が北周に代つて北朝の主となつた。北朝の主人となつて八年後の西曆五八九年に、丁度東羅馬皇帝マウリスの時代に、隋が揚子江を渡り、南朝の陳を滅ぼして天下を統一した。天下を統一したのは黒衣の周でなく周の後を承けた隋である。隋は赤又は黄を國色として黒衣を尙ばぬ。『隋書』五行志下に、

隋高祖受禪之後。上下通服黄衣。

と明記してある。黒衣の國が赤衣の國を滅ぼしたといふ。Theophylactusの所傳には、若干の誤謬が存するが、この誤傳の所由は、上來の記述によつて略了解される筈と思ふ。以上が吾が輩の新解

釋の一端である。この解釋の當否は兎に角 Theopylactus 傳ふる所のタウガスが、今の支那人又は支那を指すことに對し、は、誰人にも異議がない。

西曆十一世紀の初半の Al-Biruni から、十四世紀當初の Abouleeda に至るまで、アラブ人の地理書には、支那人に對して Tangshaj, Fongshaj, Tongshaj 等の稱呼を屢使用して居る。⁽⁴⁾ 唐時代の西曆八世紀の半頃の突厥碑文には、支那人を Tabzac (Tabzac) といひ、⁽⁵⁾ 北宋時代の西曆十一世紀の半頃の回鶻語辭典には、支那人を Tapzac といひ、⁽⁴⁾ 更に蒙古時代に西曆十三世紀の西域人が支那人を指して桃花石といふ。⁽⁵⁾ 此等の稱呼はすべて上記のタウガスと關係があつて、同一の語源に由來するものと、學界一般に認められて居る。

三

タウガス又はタムガジ等の稱呼が、支那人〔時

には支那〕を指すこと明白であるけれど、何が故に支那人をタウガスと呼ぶ歟、將たタウガスとは元來何を意味するかの解釋に關しては、諸學者の所説は一定して居らぬ。今日までに發表された學者の所説を紹介すると、畧左の如くである。

(一) De Guignes はタウガスを、西曆五世紀から六世紀の初半にかけて北支那を占領した、大魏(=拓跋魏) Tagdei の音譯と解釋する。⁽⁶⁾

(二) Richtlofen はタウガスをアラブ地理學者の所謂 Tagazgaz に關係ありと認めて居る。⁽⁷⁾

(三) Hirth 氏はタウガスを唐家 Tang-ka の音譯と解釋する。⁽⁸⁾

(四) 我が白鳥博士はタウガスを拓跋 Tak-bat の音譯と認めた。⁽⁶⁾ 白鳥博士に後くるゝこと、正に一年にして、Pelliot 氏は白鳥博士と全然同一なる拓跋 Tak-bat=Tabzac 説を發表した。⁽⁹⁾

されど此等の諸説は何れも妥當と認め難い。左

い。左に簡單にその缺點を指摘して見よう。

(一) 白鳥博士は嘗て De Guignes の大魏 *Tau-gas* 説を非難して、

余輩は De guignes 氏が *Taugas* の名は、元と托(拓)跋氏を指ししものなりとなす説には、全然同意を表するものなれども *Taugas* は大魏の對音なるべしといふ説には服すること能はず。

托跋氏が國名を改めて元魏と呼びしことは、正史に明文あれども、此國が嘗て大魏と稱せしを聞かず。況んやまた *Simocatta* の所謂 *Taugas* は *Tabgaē Tangaē* の訛れるものなれば、大魏 (*Ta-gwei*) は *Tabgaē* とは音聲の上より見ても甚しき逕庭あるをや。⁽²⁾

を評して居る。白鳥博士が拓跋部の正しき國號は元魏で大魏でないとの斷定は、勿論間違と申さねばならぬ。事實はその反對で、大魏は正しき國號で、元魏とか北魏とか後魏とか拓跋魏とかは、

便宜上史家の附與せしものに過ぎない。當時の金

石文には、皆大魏となつて居る。されど白鳥博士の指摘せる如く、大魏 *Taugas* 説には、音韻上若干の缺陷を免れぬと思ふ。 *Tau Tam* 又は *Tab* と大とはよく一致せず、*ga* 又は *ka* も魏とよく一致せぬ。 *Tau-gas* 又は *Tam-ga* の語尾の *g* (*g*) を如何に解釋すべき歟。更に溯りて考へば、魏の國勢が塞外西域に張りし事實を認めても、大魏といふ國號が、爾く代表的に廣く使用されたといふ記録上何等の證據がない。以上の諸點が *De Guignes* 説の弱點と認むべきであらう。

(二) *Richthofen* の所説は今日では事々しく批評するに足らぬ。アラブ人の所謂 *Tagazgaz* (= *Tuzuzuz*) とは、唐時代の突厥碑文に見ゆる *Toquz Oruz* を訛つたもので、その *Toquz Oruz* とは大體に於て九姓回鶻を指し⁽²⁾、従つて支那人を指すべき *Tau-gas* とは何等の關係がない。

(三) Hirth 氏の唐家 Tangas 説は注意に價する現に Laufer 氏の如きはこの説に賛成の意を表して居る。⁽⁸⁵⁾ 吾が輩もこの説には冒頭より不賛成を唱へぬ。白鳥博士は嘗てこの Hirth 氏の所説を排斥して、

Tabgae と唐家 Tang-ka との間には、音聲に於て既に差異あるが上に Tangas の名が Simocatta に知られたるは隋代にありしと思はるゝが故に、之を以て唐家の轉訛と見るは愈々非なり。⁽⁸⁴⁾

と評した。Tabgae と唐家 Tang-ka との音韻の異同に關する白鳥博士の説明は、可なり不十分の憾があるが、姑く措いて論及すまい。Theophylactus Simocatta の年代を根據として、Tabgae (Tabae) 唐家説を排斥することは、Peliot 氏も同様である。⁽⁸⁵⁾ 併し後に論ずる如く Theophylactus の年代を隋代に限らず、唐初まで低下し得る餘地あ

りとすれば、この反對説は表面ほど有力でない歟と思ふ。

白鳥博士 Peliot 氏の反對論以外に、吾が輩の見る所に據ると、Hirth 氏の所説には次の如き二個の弱點がある。第一には唐家といふ名稱が、支那の代表的國號として、廣く諸外國民の間に使用された實際上の徵證が稍十分でない。第二には Hirth 氏も自認せる如く、Tangha(j) Tanga(s)といふ語尾の「又はsに關する説明が十分でない」⁽⁸⁶⁾ (四) 吾が輩は白鳥博士の拓跋 Tangas 説に對して相當の敬意を表する。Peliot 氏の主張の一致は、愈この説を有力ならしむる感がある。されど吾が輩は次の理由によつて、之に賛同することを躊躇せなければならぬ。

(a) 北朝時代を通じて、後魏の國威が最も北塞西域に擴張したのは事實であるが、その國威は到底遠く漢唐に及ばぬ。その後魏の拓跋といふ部名

が、爾く代表的に諸外國民の間に廣く使用されたであらう歟。

(b)單に道理上のみでなく、實際上に就いても後魏時代に拓跋といふ部名が、爾く代表的に使用された例證が見當らぬ。尠くとも拓跋といふ名稱が、支那人又は支那を代表した、記録上何等の證據がない。

(c)後魏時代に拓跋部人は多く鮮卑といふ種名を自稱し外人も彼等を鮮卑と呼んで居つた。拓跋といふ稱呼は、自他ともに餘り使用した例證が見當らぬ様に思ふ。鮮卑は慕容部、宇文部、拓跋部等に分かれて居るが、慕容部の全盛時代でも、拓跋部や宇文部の全盛時代でも、彼等は一般に鮮卑の稱呼を用ひた。『晋書』卷百十四の載記十四の王猛傳及び苻融傳に、鮮卑羗虜とある鮮卑とは、慕容部を指したものである。『資治通鑑』晋紀二十六の太元五年(西曆三八〇)の條に、趙整が時事を諷

せる歌を載せて、遠徙_二種人_一留_二鮮卑_一とあるに、胡三省は謂_下徙_二諸氏_一而留_中慕容_上也と註して居る。又同書晋紀二十七の太元九年の條に、前秦の苻堅が慕容部の離叛を怒り、長安在住の慕容部人を殲滅した事實を記して、

城內鮮卑。無_二少長男女_一。皆殺之。

とある。當時慕容部を指して鮮卑と稱せしこと疑を容れぬ。

北齊の高祖高歡は準拓跋人である。『北齊書』卷一の神武帝紀上に、彼が久しく北邊の拓跋部落の間に生長して、その風俗に感染したことを、故習_二其俗_一。遂同_二鮮卑_一と記してある。『資治通鑑』の梁紀十三の大同三年(西曆五三七)の條に、高歡が號令に拓跋部の胡語を使用することを記して、〔高〕歡號_二令將士_一。常鮮卑語とある。北齊は後魏の統を承け、殊に準拓跋人の高氏の建てた國であるからその官場では拓跋部の胡語を使用した。當時勢力

を追ふ中國人の中には、この胡語を練習して立身

の楷梯とした者もあつた。北齊の顔之推の『顏氏

家訓』卷一教子第二に、この事實を教「其鮮卑語」

と記して居る。又『北齊書』卷廿四の杜弼傳に、北

齊の顯祖高洋が杜弼に人物を問ふた時、彼は鮮卑

車馬客。會須用_二中國人_一と對へた。鮮卑車馬客と

は、高氏を中心とする、拓跋部人を指したと申

す迄もない。是に由つて之を觀ると、當時拓跋部

人を呼んで鮮卑と稱せしことを承認せなければな

らぬ。北周時代にも宇文部の胡語を鮮卑語と稱し

た、⁽²⁷⁴⁾

以上の例證を綜合すると、慕容部でも、拓跋部

でも、宇文部でも、一切差別なく、當時彼等に對

して鮮卑といふ總名を用ひたものと推斷される。

果してこの推斷の如しとすれば、外國人が後魏を

呼んで拓跋——詳しくいへば、拓跋の原語に當る

る薄弱となるを免れぬと思ふ。

(d) 假に拓跋といふ稱呼が、廣く諸外國人の間

に使用されたとしても、この拓跋の字音は Taugas

とよく一致せぬ。大魏 Taugas 説より、唐家 Ta-

ngas 説より、拓跋 Taugas 説が音韻上不都合か

と思ふ。拓跋 Tak-bat の TKBT は Tanghaj, Ta-

bgae Taugas 等の TM(△b, p, u)G(△gh, k)j

(△c, s) 等と一致せぬこと明白である。白鳥博士

は、

托(=拓)跋二字の古音は、前に證せしが如く

Tak-bat なれば、Taugae とは音聲に於いて稍

相違あれども、蒙古語系の g 音は甚だ軽くして

ん音に近き喉音に屬するが故に、漢人は Taugae

の名を Tabac 或は Tabae と聞き取りしなる

べく、而して之を譯するに托跋 Ta(△)-bat の二

字を以てせるならん。⁽²⁷⁵⁾

と辯明されて居る。たごう Taugas, Tanghaj, Ta-

bae 等の實例より推せば、この名稱に於て g の音が相當重要なを知るべく、抑諸外國人が皆 g の音を傳へ居るに、獨り支那人のみが何か故に g の音を傳へず、Tabgae を Tabae と聞き取つたであらう歟。假に支那人が Tabgae を Tabae 傳へたことを承認しても、何か故に彼等は Tabae の音譯に、拓跋、托跋、託跋の字面⁽⁸³⁾を使用したであらう歟、拓、托、託は何れも入聲で、Tabae の音を有ら⁽⁸⁴⁾ Tabae の Ta の音譯としては、甚だ妥當でない。この二點の疑問に對しては、白鳥博士の辯明も何等の効力がない。兎に角 [TMGI] 又は TBGC を主音とすべきタムガジ又はタブガチと、TKBT を主音とすべき拓跋との間には、音韻上一致し難き鴻溝がある。

四

此の如く過去に發表された諸學說には、何れも

若干の短處弱點を免れぬ。吾が輩は之に對して新に唐家子タウガス(タムガジ)説を主張したい。即ちタウガス又はタムガジを唐家子の音譯として、もと唐時代の支那人を指した稱呼と認めるのである。左にその主張の理由を略述いたさう。

(一) 支那歷代中、唐の國威は尤も廣く四方に張つた。北宋末の朱彧の『萍洲可談』卷一に、

漢威令行_二於西北。故西北呼_二中國_一爲漢。唐威令行_二於東南。故蠻夷呼_二中國_一爲唐。崇寧間(西曆一一〇二——一一〇六)臣僚上言。邊俗指_二中國_一爲漢唐。形_三於文書。乞並改爲_二宋_一……詔從_レ之。

とあるに據ると、唐の滅亡後もその國號は久しく諸外國人の間に喧傳されたことがわかる。たゞ『萍洲可談』の文面では、唐の國威は東南方面に盛にして、西北方面に振はざりし如く解せらるゝも、之は勿論間違で、唐の國威は一番西北方面に發展

して居つた。唐の天子は支那の皇帝であると同時に、支那歷代に先例のない、塞外諸族、西域諸國

共同の大君主として、天可汗といふ稱號を有した

一事實に據つても、容易にこの間の消息を了解す

ることが出来る。高宗玄宗時代の西域經營の事蹟

を、事々しく紹介するに及ぶまい。此の如き國勢

強大なる唐の國名が、諸外國民の間に喧傳され、

遂に支那の代表的國號となつたことは極めて自然

と申さねばならぬ。

(二) 記録上の證據に照らしても、新舊『唐書』の

東夷傳、西域(西戎)傳、北狄傳等を檢閲すれば明

白なる如く、新羅人、靺鞨人、突厥人、回鶻人、

高昌人等、は何れも支那を唐家と稱して居る。元

來唐家とは唐の皇室を意味すべきであるが、更に

敷演して唐の皇室を戴ける支那をも唐家と稱した

その尤も明確なる實例二三を擧げると、西曆九世

紀初半の我が弘法大師がその『性靈集』卷四に、自

家製作の筆の支那製のそれに遜色なきことを述べて、

空海自家。試看新作者。不減唐家。

といひ、又宗性の『日本高僧傳指示抄』に、弘法大

師の筆蹟の見事なる、支那本國にても、之に匹敵

する者なきことを稱揚して唐家無並といひ、更に

我が清和天皇の貞觀十六年(西曆八七四)に、使者

を支那に派遣して、香藥を購求せしめた時の記事

に、唐家市_三香藥とある⁽³²⁾。此等の唐家は全然支那

と同一義である。

南宋初期の江少虞の『皇宋類苑』卷七十七に、『倦

遊錄』を引いて、

太宗泊明皇擒_三中天竺王。取_三龜茲_一爲_三四鎮。以

至_三城郭諸國。皆列爲_三郡縣。至_三今廣州胡人呼_三

中國_一爲_三唐家。華言爲_三唐言_一。

と明記してある。この『倦遊錄』とは南宋の晁公武

の『郡齋讀書志』卷十三に收めてある『倦遊雜錄』の

ことで、元豊初(西曆一〇七八?)張師正の撰する所といふ。されば唐家といふ稱呼は、支那の代表的國號として、唐北宋時代を通じて、廣く諸外國人間に使用された事實は極めて明瞭で、毫末の疑惑を容れぬ。曩に引用した『萍洲可談』に據ると、

北宋末の崇寧以後、支那政府は諸外國に交渉して中國を唐(又は唐家)と稱するを廢して、宋と稱せしめたとあるが、この支那政府の計畫は實際に於て効果なかつたものと見え、南宋元明にかけて、諸外國人は依然支那を指して唐と稱した。その例證は繁くして一々歴舉するは堪へぬ。之を要するに唐宋時代にかけて、諸外國人が支那を指して唐家と稱したといふ事實は、確に唐家子(Tangoban) (Taugas) 説の無上の強味と思ふ。

五

(三) 古來支那人は自他ともに好んで子といふ稱

呼を用ひる。例へば福建人を福建子、江南人を江南子と呼び、漢の皇家の管下に在る支那人を漢家子とも、又は畧して漢子ともいふ。この漢家子又は漢子といふ稱呼は、漢時代は勿論、漢の滅亡後も漢といふ國號と同様、依然内外に慣用された。西晋の石崇の王明(昭)君辭に、我本漢家子。將適單于庭(『文選』卷廿七)といひ、北齊の文宣帝高洋が、その太子の般の性質文弱にして、支那人の如きを嘲りて、太子得漢家(子)性質。不似我(『北齊書』卷五)といひ、又同帝が支那人の魏愷を罵つて、何物漢子(『北齊書』卷廿三)といへるなど皆その例證に供することが出来る。

同様の事情によつて、唐時代の支那人は自から唐家子又は唐子と稱し、當時の諸外國人もこの稱呼を慣用した事想像に難くない。不幸にして吾が輩は、未だ唐家子といふ稱呼が、當時の内外人に使用された文献上の證據を發見し得ぬけれど、

既に支那に對して唐家の稱呼を慣用する彼等諸外國人は、同様に支那人に對して唐家子の稱呼を使用すべきは、自明の道理として承認すべきであらう。唐の滅亡後も、唐家子といふ稱呼は唐家と同様に、依然諸外國人間に慣用されたことは、殆ど疑を要れぬと思ふ。

(四) 唐家子の古音は Tang-kia-tsi 也⁽³³⁾ Tanghaj 又は Tabgac とよく一致する。蒙古時代の外國人は或は揚州 Yang-ju を Janzai 又は Jansai と稱した。⁽³⁴⁾ 又唐時代の諸外國人は、國都の長安を、Klundan とも Khubdan とも稱した。⁽³⁵⁾ 揚 Yang が Jan (yam) に轉ずると同様に、唐 Tang が Tam に轉じ得べく Khum が Khub に轉ずると同様に Tam が Tab と轉じ得る筈である。家 Kia が Ka 又は ga の音を代表するは普通のことにて⁽³⁶⁾ 現に南宋の趙汝适の『諸蕃志』には、瓜哇島の北岸に在る Pekalongan の音譯に、蒲家龍の三字を嘗て、

居る。⁽³⁷⁾ 即ち Kw の音に家の字を擬した譯である子 Tsi と同音なる資、紫の字が ts() 又は ts() の音を代表する例から推すと、子の字音と ts() 又は ts() の音と、頗る類似せるものと認めねばならぬ。以上論せし所を綜合すると、唐家子 Tang-kia-tsi の音は、最もよく Tanghaj 又は Tabgac と一致するといふに歸着する。

次に Tangas の稱呼に就いて考察するに、龍 Long の字音は唐時代のトルコ人の間に Lu 又は Lu を傳へられ、⁽³⁸⁾ 蒙古人は龍の字音を Lo 日本人は Rin 又は Ryo と傳へ、又アラブ人は龍編といふ地名を Loulan と傳ふる事實⁽³⁹⁾ より推すと、唐 Tang (Tam) の字音が、外國人の間に Tau と轉訛するものは、音韻上有り勝ることゝ認むべきであらう。現に日本人は唐の字音を Tam と傳へ、アラブ地理學者は Tanghaj 又は Tonghsj を或は Tonghaj (Tonghadj) に作つて居る。⁽⁴⁰⁾ 子 Tsi の字

音も s 又は s₂ に轉訛し易い。『元史』に波斯の Shu-
Is といふ地名に設刺子の字を當てゝある。⁽⁴⁴⁾ 朝鮮
の五加耶の一なる比斯伐を眞興王碑に比子伐に作
り⁽⁴³⁾ 我が國に傳へたる子の字音の s₂ なることも
亦參考に資すべしと思ふ。かくて唐家子と Taugas-
s₂ との音韻上の轉訛が、比較的容易となる筈で
ある。

要するに唐家子 Taugas (Tanghaj) 説は、從來
の大魏 Taugas 説、唐家 Taugas 説、拓跋 Taugas
説等に比して、音韻上尤も無難なる事實は、誰人
と雖も承認せなければならぬ。

(五)唐家子 Taugas (Tanghaj) 説にとりて、唯
一の故障と見るべきは、初めて Taugas といふ稱
呼を記録に傳へた Theophylactus Simocatta の時
代である。彼の Taugas に關する記事の一節に、
我々の時代即ちマツリス皇帝の時代 (西曆五八二
——六〇二) — Vers notre époque, sous l'empere-

ur Maurice——と明記してあるに據ると⁽⁴⁴⁾ この記
事は或は隋時代に作られたものであらう。白鳥博
士や Pelliot 氏は之を根據として Hirth 氏の唐家
Taugas 説を排斥して居る。若しこの反駁を正當と
すると、自然吾が輩の唐家子 Taugas 説も亦成立
し難い。

それ⁽⁴⁵⁾ Theophylactus の記録の正しき年代は、
容易に確定することが出来ぬ。彼の記録の中には
西曆六二八年に起つた波斯王 Chosroes II の死去
のことを載せてある。⁽⁴⁵⁾ 少くとも彼は西曆六三〇
年の頃まで生存した。⁽⁴⁶⁾ 否その以後まで生存した
かも知れぬ。⁽⁴⁷⁾ Coedès 氏は彼の年代を單に西曆
七世紀の前半と指定して居る。⁽⁴⁸⁾ 若し彼が西曆六
三〇年、若くはその以後まで生存し、晩年まで著
作を繼續し、若くは増補に従事したものとすると
——此等の事實を否定すべき何等の積極的證據が
ない筈である——吾が輩の唐家子 Taugas 説の唯

一の故障も、餘程緩和されて來る。

『資治通鑑』唐紀三に據ると高祖の武德二年(西曆六一九)に、葱嶺以東の諸國は皆唐に朝貢して居るから、唐家といふ稱呼は後くもこの頃から廣く西域に傳つたに相違ない。『唐會要』卷九十九に據ると、太宗の貞觀三年(西曆六二九)には、四方の諸國の唐に朝貢するもの愈多く、此等朝貢せる萬國の使人の、千狀萬態なる詭異なる服裝を圖し、王會圖を作つて後世に傳へた程である。その翌貞觀四年(西曆六三〇)に太宗は東突厥を滅ぼして、塞外諸種族より天可汗の尊號を受けた。されば後くもこの時代には、唐の威名は遠く印度、波斯、羅馬の端まで聞き、Thophylactus が唐家子の名をTangas と訛り傳へたりと解釋して何等不都合なにかと思ふ。

タウガスといふ稱呼の解釋は可より困難な問題である。吾が輩の新説にも多少の弱點を免れぬ。

殊に初めてタウガスといふ稱呼を傳へた Thophylactus の年代を、より直接により正確に調査すべき便宜を有せぬことを遺憾に思ふ。たゞ從來發表された諸説に比して、或はこの新説の方が幾分なりと可能性が多いかと、試に發表した迄である。

必しも確信ある定説でないことを附言して置く。

(大正十一年八月十八日)

參照

- (1) Richthofen; China. Bd I, s. 437-438. Pelliot; "Origine du nom de Chine" (Young Pao, 1912), pp. 727-742.
- (2) Vincent; The Commerce and Navigation of the Ancients. vol II, "Periplus of the Erythrean Sea", p. 116-117. Mc Crindle; Ancient India as described by Ptolemy. p.9
- (3) Richthofen; China. Pl. I, S. 566.
- (4) Lacouperie; The Western Origin of the Early Chinese Civilization. pp. 63-68
- (5) Lanfer; "The Name China" (Young Pao, 1912) pp. 719-726
- (6) Yule and Burnell; Hobson Jobson. p. 174. Rockhill;

The Journey of William of Rubruck. p. 155.

誌』頁一六——一七

- (7) Yule and Cordier; Marco Polo. Vol. I, p. 12. Bretschneider; Mediæval Researches. Vol. I, d. 209. Pelliot; "L'Origine du nom de "Chine". (Toung Pao, 1912) p. 732
- (8) Pelliot; *Ibid.* p. 730
- (9) Yule and Cordier; Cathay. Vol. I, p. 30. Coedès; Textes d'auteurs grecs et latins. p. 140
- (10) Ki proth; Sur les différents noms de la Chine". (Mémoires de Tome III) p. 263
- (11) Yule and Cordier; Cathay. Vol. I, p. 30
- (12) Sprenger; Die Post- und Reiserouten des Orients. s. 90
Yule and Cordier; Cathay. Vol. I, p. 33
- (13) Thomsen; Inscriptions de l'Oikhon. pp. 26, 139
- (14) Radloff; Kudatku Bihk. Bd. II, s. 18
- (15) 元の邱處機の『西遊記』卷上
Bretschneider; Mediæval Researches. Vol. I, p. 71
- (16) Yule and Cordier; Cathay. Vol. I, p. 32
- (17) Richtsholen; China. Bd. I, s. 565.
- (18) Hirth; "Nachworte zur Inschrift des Tonjukuk." s. 35
- (19) 白鳥博士「東胡民族考」(明治四十四年十一月の『史學雜
(20) Pelliot; "L'Origine du nom de Chine." P. 732.
- (21) 白鳥博士「東胡民族考」頁一六
- (22) 羽田博士「九姓回鶻と Toquz Oryuz との關係を論ず」(大正八年一月の『東洋學報』頁五五以下
- (23) Laufer; "The name China" (Toung Pao, 1912) p. 723
- (24) 「白鳥博士東胡民族考」頁一六
- (25) Pelliot; "L'Origine du nom de Chine." p. 731.
- (26) Hirth; "Nachworte zur Inschrift des Tonjukuk." s. 35
- (27a) 『隋書』卷三十二の經籍志一
- (27b) 白鳥博士「東胡民族考」(明治四十四年十一月の『史學雜誌』頁一六
- (28) 同上頁一二
- (29) Karlgren; "Prononciation ancienne de Caractères Chinois etc." (Toung Pao, 1919) p. 120
- (30) 『資治通鑑』唐紀九の貞觀四年の條
- (31) 明治三十四年九月の『史學雜誌』頁八一
- (32) 『三代實錄』卷二十五
- (33) Karlgren; "Prononciation ancienne etc." pp. 113, 118, 120
- (34) Ivar Hallberg; L'Extrême Orient dans la littérature etc.

p. 273

(35) Yule and Cordier; Cathay. Vol. I, p. 31

(36) Julien; Methode etc. p. 122.

(37) Hirth and Rockhill; Chao-ji-kun. p. 79.

(38) Julien; Methode. d. 221

(39) Chavannes; Le Cycle Turc des douz animaux' (Young-

Pao, 1906) p. 52

(40) 拙稿「イブソフ・ヨルカードヤーに見たる支那の貿易港」

(大正八年十月の『史學雜誌』頁廿二—廿三)

(41) Reinand et Guyard; La Geographie l'Aboulfeda. Tome

II, 2, p. 123. Yule and Cordier; Cathay. Vol. I, p. 33.

(42) Bretschneider; Mediaeval Researches. Vol. II, p. 127

(43) 今西博士の「加羅羅城考」(大正八年十月の『史林』)頁五六

(44) Coedès; Textes l'Auteurs grecs et latins. p. 140

(45) Yule and Cordier; Cathay. Vol. I, p. 29

(46) Sini h; Dictionary of Greek and Roman Biography and

mythology. Vol. III, p. 1091

(47) Yule and Cordier; Cathay. Vol. I, pp. 29-30

(48) Coedès; Textes de. p. 138.

聖覺を中心としたる親鸞と法然 (下)

文學士 松本彦次郎

四

鎌倉時代に於ける新宗派分離の問題は宗義の獨立を根柢とすべきか、また教團教會の特殊成立よ

り見るべきものであるかは問題である。法然は淨土の三部經を撰擇し思想上より天台真言等の三經に對し之を獨立すべきものとして淨土宗あるべきを論じた。けれども舊い習慣は事實上法然の新宗